

2025 年度 山梨学院大学 卒業生調査報告

2025 年 9 月

学事課 IR 担当：潘秋静

学長補佐：倉澤一孝

1. 調査目的

山梨学院大学は、本学の教育活動等について検証・評価し、今後の教育や学生支援活動の充実を図るために IR 調査を実施している。

本調査では、過去 5 年間に本学を卒業した学生を対象に、本学の教育、学生支援、学修成果、また、卒業後のキャリアについて、卒業生を対象に調査を実施した。この調査は、卒業生の現状を把握するとともに、本学の教育活動の有用性について卒業生から評価を求めることによって、エビデンスに基づき今後の施策を検討することを目的として実施した。

2. 調査期間

2025 年 8 月 18 日～2025 年 9 月 5 日

3. 調査方法

アンケートに回答を依頼するメールを卒業生に送付し、Web アンケートシステム「Microsoft forms」を利用して回答を収集した。

4. 調査対象

- ✓ 調査対象：学生センターの卒業生連絡リストに登録されている 1021 名
- ✓ 有効回収率：3.4%（回答：35 名）

5. 調査項目

- ✓ 第 1 部 回答者情報
- ✓ 第 2 部 大学時代の学習・生活から見た本学の教育効果
- ✓ 第 3 部 卒業後の就職・仕事状況から見た本学の教育効果
- ✓ 第 4 部 学習経験の総合評価と本学に対する愛着度

6. 調査結果の要約

<第 1 部 回答者情報>

- 本学の卒業生リストに登録されている 1021 名に回答を依頼し、35 名（3.4%）から回答があった。

- 回答のあった卒業生の卒業年度は、「2023年3月/9月卒(14名)」(40%)が最も多く、次いで「2022年3月/9月卒(7名)」(20%)、「2019年3月/9月卒(5名)」(14%)、「2021年3月/9月卒(4名)」(11%)、「2020年3月/9月卒(4名)」(11%)、「2018年3月/9月卒(1名)」(3%)の順である。
- 回答のあった卒業生の出身学部は、「経営学部」43%が最も多く、次いで「法学部」29%、「スポーツ学部」14%、「国際リベラルアーツ学部」11%、「健康栄養学部」8%の順である。
- 現在の住所を尋ねたところ、「山梨県(8名)」(23%)が最も多く、次いで「海外(7名)」(20%)、「東京都(4名)」(12%)、「神奈川県(3名)」(9%)の順である。

<第2部 大学時代の学習・生活から見た本学の教育効果>

1. 大学時代に熱心に取り組んだ活動

大学時代に卒業生が取り組んだ活動を、「5.熱心」、「4.やや熱心」の割合でランク付けした結果、昨年度と同様にトップ3位は以下の通りとなった。

順位	大学で熱心に取り組んだこと	割合
第1位	b. 専門分野に関する知識・技術を身につけること	82.8%
第2位	a. 大卒の学歴を得るための必要な単位を取る	74.3%
第3位	c. 学部の専門分野以外に幅広く教養を身につけること(ヒューマンスキル科目・キャリア支援科目)	71.4%
第3位	h. アルバイト	71.4%

一方、「5.熱心」の割合のみを抽出すると、卒業生が大学時代に最も熱心に取り組んだ活動は以下の通りである(同率を含む)。

- ① i. 友達や人的ネットワークのづくり(40%)
- ② l. ゼミ(40%)
- ③ g. 課外活動(部活・サークル・ボランティア)(40%)
- ④ m. 卒業論文作成(34.3%)
- ⑤ b. 専門分野に関する知識・技術を身につけること(31.4%)
- ⑥ a. 大卒の学歴を得るための必要な単位を取る(31.4%)

- この結果から、卒業生は学業と並行して、ネットワーク形成やゼミ・課外活動といった人的交流に強い関心を寄せていたことがうかがえる。

2. 体験しなかった割合の高い活動

同じ質問に対して、大学時代に体験しなかったと回答した割合が高かった項目は昨年度と同様に以下の3項目であった。

順位	項目	体験しなかった割合
第1位	k. 大学院への進学準備・勉強	54.3%
第2位	n. 留学や異文化交流	34.3%
第3位	j. 企業研修やインターンシップ等	22.9%

さらに、同じ質問に対して、「体験しなかった」の割合と「不熱心」「やや不熱心」の割合を加算してみると、トップ3位は以下の通りとなった。

順位	項目	加算後の割合
第1位	k. 大学院への進学準備・勉強	74.3%(2024年：63.6%)
第2位	e. 留学や異文化交流	48.6%(2024年：63.6%)
第3位	e. 外国語の能力を身につけること（言語スキル科目）	31.4%(2024年：47.1%)
第3位	f. 資格取得・検定試験勉強	31.4%

- この結果から、「大学院への進学準備・勉強」は加算後の割合が74.3%と最も高く、昨年度（63.6%）からさらに上昇している。これは、進学を志望しない学生にとって優先度が低いことに加え、大学が「学士課程修了後に社会で活躍できる人材育成」を掲げていることから、学部卒業後すぐに社会に出る傾向が強い点が反映されていると考えられる。
- 「留学や異文化交流」は48.6%で、参加意欲や学生の意識は依然として低いとの課題が残っているが、昨年度（63.6%）より低下した。この改善は、学生の意識変化と大学の取り組みの双方の効果が反映された結果とみられる。コロナ禍後の海外渡航への心理的ハードルが下がったことに加え、大学が近年「海外文化研修」科目の開講、「チャレンジ海外」、「経済的支援の強化」、「授業中における教員からの働きかけ」といった取り組みに力を入れてきたことが影響していると考えられる。
- 「外国語の能力（言語スキル科目）」および「資格取得・検定試験勉強」は31.4%と低水準にとどまっている。語学や資格は、将来のキャリア形成に資する重要なスキルであるにもかかわらず、授業や課外活動に比べ優先度が下がりやすいことが背景にあると推察される。今後は、語学学習や資格取得を学びの一部として位置づけ、実践的な活用場面と関連付けることが、学生の動機づけ向上に寄与すると考えられる。

3. 山梨学院大学におけるコンピテンスの習得状況

山梨学院大学で身につけたコンピテンスを、「5. かなり身に付けた」と「4. ほぼ身に付けた」の割合を合わせてランク付けした結果、卒業生が最も高く評価された上位3項目と下位3項目は以下の通りとなった。

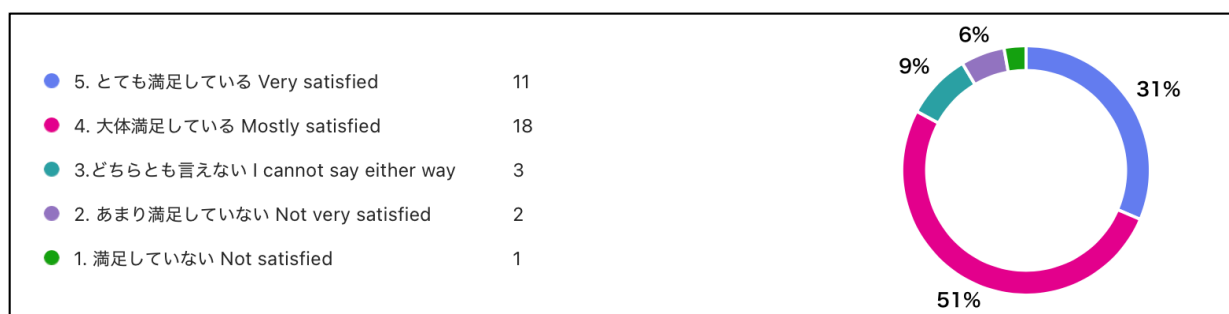
順番	上位3つのコンピテンス	割合
第1位	g. 自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力	88.7%（2024年：76.5%）
第2位	k. 人柄・倫理観・責任意識	80.0%（2024年：74.6%）
第3位	f. 環境に適応する力や自己管理する力	71.5%（2024年：77.8%）
第3位	a. 専門分野に関する知識・技術	71.5%

順番	下位3つのコンピテンス	割合
第1位	i. 資格の数	45.7%
第2位	d. 職業的知識・技術	25.7%
第3位	c. 学際的な知識・技術	22.8%

- この結果から、本学の教育を通じて、卒業生が特に倫理観、柔軟性、自己認識といったソフトスキルを高く身につけていると評価されていることが明らかになった。一方で、卒業生は保有資格の数が少なく、職業的知識・技術や学際的知識・技術の習得が比較的弱い傾向にある。一定の資格を取得することは、専門性の証明やキャリア選択の多様化、自己成長や信頼性の向上といったメリットにつながると考えられる。したがって、就職活動における競争力を高め、将来のキャリア形成を促進するためには、資格取得を意識した教育や指導の充実が求められる。また、産業界で実践力や学際的視点の重要性が高まっていることを踏まえると、インターンシップ、産学連携科目、学際的プロジェクトの拡充を通じ、在学中からこれらの能力を強化する取り組みが必要である。

4. 教育・キャンパスライフ全般に対する満足度

本学の教育・キャンパスライフ全般に関して、「とても満足している」(31%)、「大体満足している」(51%)、と回答した卒業生の割合を合計すると、昨年度の77%よりやや低いものの、72%の卒業生が本学の教育・キャンパスライフに肯定的な評価をしていることが明らかになった。



<第3部 卒業後の就職・仕事状況から見た本学の教育効果>

- 主な勤務先の業種は、「公務」(14%)、「卸売・小売業」(13%)、その他(10%)、「製造業」(8%)、「教育・学修支援業」(8%)、「金融・保険業」(7%)、「医療、福祉」(5%)、「情報通信業」(5%)、である。
- 回答のあった卒業生は、主に「事務従事者」(17%)、「サービス職業従事者」(9%)、「販売従事者」(6%)、「製造技術者」(6%)、「管理的職業従事者」(6%)、「保安職業従事者」(6%)、といった職種に従事している。
- 現在働いている勤務先が何社目であるか尋ねたところ、「学部卒業後、転職なし、1社目」(57%、昨年度:71%)が最も多く、次いで、「2社目」(31%、昨年度:17%)、「3社目」(6%)、「その他」(6%)、の順である。最初に就いた仕事から転職または退職した理由は、「新たなステップアップを図るため」(17%)、「収入面での不満」(9%)、「労働時間での不満」(6%)が上位になっている。

1. 現在の仕事で役に立っている学習経験

現在の仕事で役に立っている学習経験を「5. かなり役立っている」と「4. ほぼ役に立っている」の割合を合わせてランク付けした結果、上位5位は以下の通りである。

順位	現在の仕事に有用となる学修経験	割合
第1位	l. 友達や人的ネットワークの作成	48.5%
第2位	k. アルバイト	45.7%
第3位	j. 課外活動（部活・サークル・ボランティア）	40.0%
第3位	b. 専門分野以外に幅広く教養科目（人文・社会・自然）	40.0%
第4位	h. 留学や異文化交流	34.3%
第5位	a. 専門科目	34.2%

- この結果から、正課の学修経験およびそれを通じて培われたコンピテン스가、卒業後の仕事に有効であると認識されていることが昨年度と同様に示された。また、課外活動や人的ネットワークの形成も、卒業後の職務遂行に有益と考える卒業生が多いことが明らかとなった。したがって、正課と課外活動をバランス良く統合できる仕組みを整備することは、本学の教育改善および質的転換を推進するうえで重要である。さらに、現代社会で求められる国際的素養の観点からも、留学や異文化交流が職務上の有用性を持つことが2025年度の調査結果により確認された。

2. 企業が採用時に重視する能力

卒業生が考える、企業が採用で重視するコンピテンスを「5. かなり重視する」と「4. 重視する」の割合を加算してランク付けした結果、上位5位は以下の通りとなった（企業調査の結果を併記）。

卒業生が考える、企業が採用で重視する能力	割合	順位	企業の順位
p. 人柄・倫理観・責任意識	84.3%	第1位	第1位:93.3%
i. 環境を適応する力や自分を管理する力	74.3%	第2位	第3位:69.3%
m. 自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力	71.4%	第3位	第2位:77.3%
n. 異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協調する力	60.0%	第4位	第5位:58.7%
o. 学んだ知識を用いて、社会の問題解決に活かす力	54.3%	第5位	第3位:69.3%
k. ものごとを批判的に吟味・検討・改善する能力	54.3%	第5位	第6位:61.0%

- 以上の結果から、推薦や紹介、資格の数、及び学部の種類といった「ハードスキル」より、人柄、環境適応力、問題解決力、批判的力といったソフトスキルは企業側によって採用時に重視されていると卒業生に認識されていることが分かった。また、企業側に同じ質問を行った結果、本学の卒業生の認識とほぼ一致していることが確認された。これは、本学の人材育成や教育改善において、長期的なキャリア展望及び個人成長に役に立つソフトスキルや汎用的能力の育成が引き続き重要であることを示唆している。

3. 企業に重視されなかった能力

「1.まったく重視しなかった」とされた能力の上位5項目は以下の通りである。

企業にまったく重視されなかった能力	割合	順位	企業の順位
c. 推薦や紹介を受けること	40.0%	第1位	第3位:18.7%
a. 学部の種類	37.2%	第2位	第2位:28.0%
d. 大学の成績	34.3%	第3位	第6位:8.0%
b. 大学の評判・知名度	31.5%	第4位	第4位:17.3%
f. 海外留学経験	31.5%	第4位	第1位:52.0%
i. 学際的な知識・技術	31.5%	第4位	第8位:46.4%
p. 資格の数	31.4%	第5位	第5位:5.3%

- 2022～2024年度の卒業生・企業調査と同様、卒業生の間では海外留学経験や国際能力の重要性を過小評価する傾向が依然として見られる。しかし、2025年度の結果ではこの傾向が緩和しつつあることが示された。これは、国際化が進む社会において、海外経験や外国語運用能力が不可欠であるという意識の高まり、そして大学が国際的人材育成に向けて実施してきたプログラム（海外文化研修科目の開講、チャレンジ海外、経済的支援の強化、授業中における教員からの働きかけ、語学教育の強化等）の成果が反映されたものと考えられる。

4. 仕事・生活に対する満足度

卒業後の仕事に関して「とても満足している」「大体満足している」と回答した割合は71%で、昨年度（74%）とほぼ同水準であった。また、仕事以外の生活については74%が満足と回答しており、本学の卒業生はおおむね、仕事と生活の両面において高い満足度を維持していることが明らかになった。

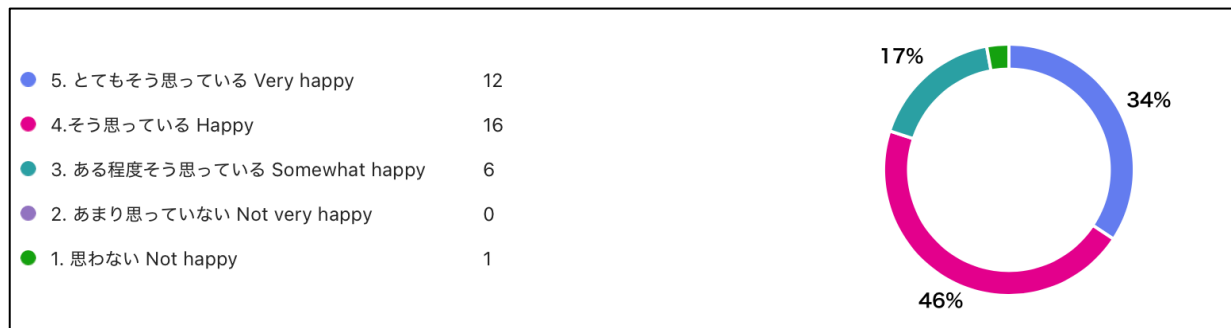
<第4部 学習経験の総合評価と本学に対する愛着度>

1. 本学への投資価値

- ① 18歳の時点に戻り再度高校卒業後の進路選択ができると仮定した場合、「四年制大学に行く」と回答した卒業生の割合が最も多く、89%に達した。それに対し、「進学しない」（6%）、「専門学校に行く」（3%）、「浪人」（3%）は少数にとどまった。
- ② さらに、「四年制大学に行く」と回答した卒業生に対し、「再度18歳に戻ったら同じ大学を選ぶか」を尋ねたところ、「選択したい」45.7%が最も多く、次いで「どちらとも言えない」31.4%、「選択したい」17.1%、「選択したくない」5.7%の順となった。
- ③ また、同じ専門分野を再度選択するか尋ねた結果では、「選択したい」31.4%、「とても選択したい」28.6%であり、肯定的回答を合わせると60.0%に達した。すなわち、10人中6人の卒業生は自分の専門選択に後悔がなく、本学が取り組んでいる専門教育に肯定的な評価をしていることがわかった。

2. 本学入学への評価

「本学に入学してよかったと思っているか」を尋ねた結果、図に示すように、「とてもそう思っている」(34%)と「そう思っている」(46%)と回答した割合は80%であり、昨年度(68%)から12ポイント増加した。その結果は、入学経験の価値に対する卒業生の肯定的認識が着実に高まっていることを示している。



3. 本学への愛着度と課題

本学への愛着度については、本学への進学を他の人に推薦するか尋ねたところ、「推薦する」43%と回答した割合が最も多く、次いで「どちらとも言えない」31%、「とても推薦する」14%、「あまり推薦しない」6%、「全く推薦しない」6%であった。昨年度と比べ、推薦度が上昇傾向にあることが分かった。一方、「どちらとも言えない」と回答した割合が依然として3割を超えており、大学生活や教育内容に対する満足度をより広く浸透させる工夫が今後の課題であると考えられる。たとえば、卒業後を見据えたキャリア支援や、在学中の学びと課外活動を結びつける仕組みや学生支援をさらに充実させることが、大学への愛着向上に寄与すると推察される。

